

ハイネにおける

「流謫の神々」主題の考察

宮野悦義

キリストによるオリンポスの神々の追放、ギリシャ神話の神々のキリスト教的悪魔への変容という題材は、ハイネのもっとも得意とするところであった。それは、一つには民間信仰とか伝説に対する彼の深い関心によるものである。ロマン派の詩人として出発した彼は、いわばドイツの民衆の心ともいべき民謡・民話の世界、そしてその住人である妖精たちに深い愛着を抱いており、終生それを失わなかった。しかし、初期の試論「浪漫主義」に早くもうかがわれるように、当時のドイツの惨めな状況のもとで、さまざまな相剋の中に身をおかねばならなかったハイネが、単なる中世的幻想に耽溺しているはずはない。彼の成長とともに、この浪漫的 세계には新しい角度からの照明があてられる。そして、「追放された神々」、「流謫の神々」というテーマは、単なる民俗学的興味を超えた世界観的な問題に発展して行くのである。七月革命以降、異郷の地バリーに、二十数年の亡命生活を余儀なくされたハイネの後半生に照らしてみれば、「流謫の神々」という言葉のもつ重みはおのずから明白

であろう。以下、このテーマに関する概論的考察にうつろう。

1

まず最初に、ハイネの作品の中から、神々の追放と流謫を描いたいくつかの例を紹介しよう。

「いや、断じてあれは雲ではない

まさにあれこそは、ギリシャの神々

むかしは喜んで世界を支配していたが

追ひ払われ死に絶えて、いまは

おそろしい幽霊となって

深夜の空をさまようのだ」

(Die Götter Griechenlands)

「突然そこへ、一人のユダヤ人が、色蒼ざめ血を滴らせながら、喘ぎ喘ぎやって来た。頭にはいばらの冠をかぶり、肩には大きな木の十字架を背負っている。彼はその十字架を神々の高い食卓に投げつけた。黄金の大杯が揺れる。神々は声も出さず、色を失い、ますます蒼ざめ、ついにはまったく霧となって消え失せてしまった。

そこで悲しい時代がやって来た。世界は灰色になり、暗くなつた。しあわせな神々はいなくなると、オリンポスは病院ホスピタルになった。そこでは、皮を剥がれたり、焼かれたり、突き刺されたりした神々が、退屈そうにのろのろ歩きまわったり、傷の手当てをしたり、悲しげな歌をうたったりしていた。宗教はもは

や喜びではなく、慰めを与えるものとなった。それは、痛ましい、血の流れでる罪人宗教であった。」

(Die Stadt Lucca)

「これらすべての歎息、これらすべての楽しい哄笑は、消え失せてすでに久しい。そして昔の神殿の遺跡には、民衆の考えによれば、いまでも古代ギリシヤの神々が住んでいるのだが、キリストの勝利によって、その力をすべて失ってしまった。この神々はいまや悪しき悪魔であって、日中は、かつての自分たちの栄光の場であった暗い廃墟の中で、ふくろうやがま蛙にまじって身をかくしているが、夜ともなると、愛らしい姿で出てきては、罪のない旅人や無鉄砲な若者をだましたり誘惑したりするのである。」

(Elementargeister)

これらの引用からもうかがわれるように、キリストによる神々の宴の破壊、神々の追放と流謫という神話的仮構のもつ意味はきわめて複雑である。まずなによりも、それは、古代の異教的世界からキリスト教世界への移行という歴史的事実をふまえている。さらにはその根底にある哲学、世界観が、前者の快樂主義、後者の禁欲主義という形——ハイネは別のところで、感覺主義と唯心論、ヘレネ主義とナザレ主義という表現を用いている——で対比され、後者の前者に対する勝利が象徴的に語られている。従って、このテーマは神話、歴史、思想という三層構造のものといわねばならない。神話は、歴史の経過の中で、人間の思想もしくは理想像の変化とともに、さまざまな変貌を

とげる。従って、神々の争いは、それを支える人間の争いであり、思想の対立である。抒事詩「アツタ・トルル」で主人公の熊の信ずる神が巨大な北極の白熊であったように、ハイネにとって神は、その時代時代の人間の、拡大され理想化された投影であった。オリンポスの神殿でネクタールを酌み交す神々は、従って、古代ギリシヤにおける人間の理想である。そして、神々の敗北は、この人間の理想の敗北である。しかし、人間性の理想的投影であるべきものが、完全に、未来永劫にわたって否定される、ということはない。たとえ苛酷な状況にあっても、消滅するのではなく、「流謫」の地キリスト教世界の中で、ほそぼそと生きながらえるのである。そして、「流謫の神々」は、この理想を抱きつづける人間の象徴にはかならない。事実、「皮を剝がれたり、焼かれたり、突き刺されたりした」のは、こうした中世の人々だったのである。もちろん、中世の人間の大多数は、新しい理想、新しい神話の支配下にあるのだが、一方では、民衆の魂のふるさとともいふべき民謡や民話の世界で、かつてのギリシヤ神話の英雄たちの世をしのぶ仮の姿つまり、悪魔に対する愛情が生きつづけている。この悪魔信仰こそ、古代ギリシヤの理想に対する無意識の共感のあらわれである。

さて、このようなハイネの思想の中には、いうまでもなく、古代異教世界に対する憧憬がある。ヘレネの世界は、ハイネにとって、歴史的過去ではなく、人類の未来の理想世界である。従って、中世における悪魔信仰、つまり無意識的なギリシヤ神

話への愛着は、意識的なものに転化されねばならない。「流謫の神々」は、再びオリンポスに帰り、潜在的な神々が真の神々の座に戻らねばならない。それは、とりもなおさず、中世的理想の支配下にある人間が自らを意識し、神々ともにかつての理想世界を回復することを意味する。ハイネのこの世界観を支えるものは、キリスト教がもはやその歴史的角色を終えて、時代の動きを阻害するものとなったという認識である。人類の歴史について、ハイネは次のように述べている。

「かつて世界は完全であった。古代において、そして中世において。外面的には闘争があったにせよ、そこにはなお、いぜんとして世界統一があった。そしてまた、そこには完全な詩人もいた。われわれはこれらの詩人を尊敬もし、彼らの詩を樂しもうとする。しかし、彼らの完全性をまねることは、まねである以上、虚偽である。」

(Die Bäder von Lucca)

ハイネによれば、古代ギリシャの世界は完全な調和の世界であるが、他方、キリスト教世界は、「霊の一元化」による、「諦念」に支えられた「統一」世界であつて、前者とは異なる。中世における「霊の一元化」を極端と感じ始めた現代は、長年の病を意識し始めた「分裂」の時代である。このような認識からハイネにとって二重の闘争が始まる。一つはキリスト教批判であり、他は新時代のための新しい理念の確立である。前者においてはきわめて強力だったハイネではあるが、後者におけるハイネは、宗教的過去に宗教的未來を対置するドイツ啓蒙主義の

伝統を超えることができなかつた。ハイネは主張する。われわれは健康にならねばならない。われわれの課題は「肉の復権」である。こうすることによって、われわれはその理想とするギリシャ的調和の世界を再現しようのである。ハイネは新しい黄金時代の到來を信じて、次のように述べている。

「實際、われわれの子孫は、われわれがなにを信じ、いかに苦しんだかという話を聞かされると、まるでおとぎばなしかと思ふことだらう。そして、大いに同情することだらう。彼らはいつの日か、陽気な神々として、自分たちの宮殿の、自分たちで浄めた祭壇のまわりにつどい、むかしの人間の話のうち興ずるのだ。すると、老人の一人が、おそらくこんな話をして聞かせる。死人が神として崇拜され、ぞっとするようなお供えの儀式が行われる、という時代があつたのだよ。そこで食べるパンは死者の肉、飲むブドウ酒は血、などと信じられていたのだ。こんな話を聞くと、女たちはまっ青になり、美しくカールした花の髪飾りが揺れることだらう。男たちは、祭壇であるかまどの上に、新しい香油をふりかけて、その匂いで暗い不愉快な思ひ出を消そうとするであらう。」

(Vorwort zu den Novellen von A. Weill)

来るべき人類の第三の時代は、かつての神々の王国の再来である。主役はもはやギリシャの神々ではない。健康をとり戻し、喜びにみちあふれた未來の人類は、もはや神話を必要としない。彼ら自身が、この地上の神々の王国の住人である。こうしてハイネの中では人類の宗教的過去が屈折して未來像を結ぶ。それ

こそ「流瀆の終焉」なのである。

2

唯物論と唯心論の綜合、靈と肉の調和、といったハイネの言葉にみられる弁証法的思考は、サンダーによれば、ヘーゲルの影響もさることながら、ハイネをとりまく社会的環境がおおいに作用している。ハイネの生きた時代のさまざまな対立が、ハイネの内奥に複雑な影をおとし、それが、対立物の統一、調和の哲学への憧れを生んだ、というのである。この指摘は正しい。なかでも、ユダヤ人ハイネにとって、宗教上の問題が投じた一石は、彼の全生涯にとって、決定的な意味をもつ。彼の育った環境から察して、彼がユダヤ教の体現者であったとは考えられない。彼は「ユダヤ人文化学術協会」の一員として、ユダヤ人の自由・解放のために、積極的に運動に参加してはいるのだが、彼の姿勢はユダヤ人問題の枠を超えていた。おそらくはヘーゲルの講義とゲーテの作品に接したためと思われるが、彼はユダヤ教対キリスト教の対立という次元を超えて、新しい、より高い立場を探っている。プロテスタントへの改宗と、それをめぐるさまざまな内面の葛藤は、その傾向をますます強めた。もはや彼の合言葉は、被圧迫民族であるユダヤ人の解放ではなく、「人類の解放」となる。ユダヤ教徒とキリスト教徒の和解は、「自由宗教」の旗の下においてのみ可能となる。新しい時代のための新しい宗教の唱導、これがハイネの課題となるのである。しかし、このようなハイネの思想的発展には、当然のこと

ながら抽象化の危険が伴っていたといえる。さまざまな対立の渦中であって、自らの確固たる立場を求めると急なあまり、彼は現実の問題を看過し、一切のプロセスを省略して、一つの理念に短絡しようとした。そのため、在独時代のハイネは、たとえばブラーテンとの抗争にもうかがわれるように、現実の困難に直面したときに、少からぬ動搖、前進と後退とをくりかえし示すことになる。ハイネが、その抱く理念に安住できたのは、フランスに於ける一時期だけである。パリで、彼はサン・シモンズムという、彼自身が求めていた新しい宗教と、その使徒たちを見出した。そして、そこでは彼のユダヤの血統の故に、彼の活動を妨げようとする敵もいなかった。彼は、ここで始めて「人類」という普遍概念と自己との一致を感じることができたのである。サンダーは、この点について次のように解説している。

「ハイネは、若きプロテスタントのドイツ人としてパリに到着した。パリは彼に寛大であった。『宗教』についての論文で、彼は読者に、自分は、正統派でこそないが、プロテスタントであると語っている。妻の眼にも、彼はプロテスタントのドイツ人だった。彼の態度は、偽装でもなんでもなかった。ドイツをあとにして、彼は自信をとり戻し、これまでなかなか得られなかった地位を確保した。しかし、彼が真の自己を認識しえたのが、異郷での亡命の間だけだという点に問題がある。彼がやっと到達した身分は、やはり、仮構でありしかも現実、といったものにとどまっていた。そして、彼自身、それに気づいていた

はずである。彼がドイツ人なのかどうか、人々は疑った。自分はユダヤ人なのかどうかとハイネは自問した。しかし、一つだけはっきりしていることがあった。彼は、彼のまわりのすべての人と同じく、人間だったのだ。彼は完全なドイツ人でもユダヤ人でもなく、ましてやフランス人ではなかった。彼は自分がドイツ人だと考えてはいたが（彼がドイツの国籍を放棄しなかったのはそのためである）、なによりもまず、彼は人類の一員であった。」

『人類』とは抽象である。人類にのみ属するというのは、普遍のために一切の特殊を放棄することを意味する。ハイネは、自分が分裂の時代に生きる人類のシンボルだと考えている。この自己と人類の同一、あるいはむしろ、同一であるという観念——彼がドイツ哲学から学んだものである——は、現実における基盤をもっていたともいえよう。しかし、人類と同一視される彼自身とは、必然的に一つの単なる可能態であり、仮構でも現実的な自己である。彼が人類解放のため、インターナショナルイズムのための戦いを開始したとき、この可能態としての自己、仮構でも現実的な自己の実現のため、彼は文字どおり苦闘したのであった。しかし、もちろんのことだが、彼が永続的勝利をかちうることはなかったのである。ヘルダー、ゲーテ、シラーが人類という理想、可能態に達したとき、彼らには確固たる地盤があった。彼らはドイツ人であり、誰もそれを疑わなかった。だが、ハイネを支えるものは、さまざまな可能態に過ぎなかったのである。」

この「仮構であってしかし現実」というサンダーの表現は、ハイネの本質的部分を適確にとらえたものといえよう。ハイネが、自分を支える一つの抽象、サンダーの指摘する脆弱な基盤を果して意識していたかどうか、その点は疑問である。少くともバリに移住してから十年余りの間、彼は自己と人類の一致、彼の主観的要請と時代の動きとの一致を信じている。彼の周囲には、まだ、それが仮構であって現実ではないことを意識させるような情況が生れてはいない。彼は、人類とともに「流謫の神々」の一人であり、可能態の実現、つまりは来るべき「流謫の終焉」に、なんらの不安をも感じていないのである。

3

流謫の終焉、第三の黄金時代の到来というハイネの期待に、現実はどうこたえてくれたであろうか。周知のように、一八四〇年代の後半、彼は時の政治の動きを前に動揺を示し始めていく。それは、彼の期待する未来像と現実の動きとが齟齬を来し始めたからにはほかならない。「自分は過去の人間だ」という言葉がくりかえし聞かれるのも、この頃からである。ハイネの描いた人類の未来図は、「神々の民主主義」であった。ところが、新しい時代の動きの担い手コミュニニストたちは、彼の期待に反して一面的な唯物論者であり、調和を求めらる感覚主義者Ⅱヘレネ人ではない、彼らの出現は歴史の必然だが、彼らは人間存在の全体性を表わすものではなく、従って物質と精神の和

解はない。唯心論と唯物論という一面的立場相互の戦いは決して終らない。一方が他方は倒して調和に達することは不可能なことだ。従って黄金時代の到来はなく、流謫の状態は永遠に続くことになる。こうしたハイネ晩年の歎きの原因は、彼がプロセス抜きで調和の世界、第三の時代を夢みていたためである。前に述べたような、可能性と現実、仮構と現実との混同がここにも明白である。

サンダーは、ハイネが「革命」を政治的な意味で扱っていないことを指摘している。ハイネにあっては政治思想が革命を惹起するのではなく、革命が先にあって、これに政治思想が従属している、というのである。ハイネの革命とは、物質の解放、人民の福祉のための運動であって、むしろ、宗教的な次元で考えられる。従って、それは「人類の全体的解放」であり、「全体的革命」なのだ。晩年の「自由戦争の最前線」を三十年來忠実に守って来た」という詩句は、二十数年前の「人類解放戦争の勇敢な一兵卒だ」という言葉に対応するものではあるが、折々の政治の動きと直接の関係があったわけではない。むしろ、ルイ・フィリップに対する彼の立場、君主制の擁護の発言など、現実の政治にみせた一貫性の欠如は顕著なものがある。しかし、それは決してハイネの内部での一貫性の欠如を意味するものではない。彼の焦点は合っている。彼は彼のいう革命、人類全体の解放、極言すれば新しい宗教のために戦ったのである。従って彼と行動を共にした同志たちとも、ある点までは一致し、そして結果的には離れて行く、それどころか、対立するに至ると

いった経過が、くりかえし見受けられる。前にもふれたベルネとの関係、青年ドイツ派の詩人たちとの関係、サン・シモン主義者たちとの関係がそうだ。しかし、そのもつとも顕著な例が、晩年のコミューニストたちに対するものである。彼は、他のグループの場合よりもいっそう彼らには接近していたし、「ルテールツィア」のフランス版への序文にも明らかのように、彼らを支持すらした。しかし、それにもかかわらず、彼はアウトサイダーにとどまっていた。決して消極的な意味ではなく、期待と絶望、幻想とその破壊という、激しい内面の葛藤をはらんではいたが、彼自身のヘレネ的未来、過去の伝承的概念で構築された未来図と、彼らの「デモーニッシュな必然性」とのみぞは、あまりにも深かったのである。

ハイネにとって残されたものは「詩」である。彼はヴェールト宛の手紙にこう記している。

「……私は、宗教も哲学も必要とせず、両者とはまったく無関係な詩人として死んで行きます。」

彼が「流謫」の状況を脱することは不可能となった。今や彼を神につながるものは「享受」ではなく、「創造」しかない。現実的に「可能態」としての自我の実現を期待することができなくなった今、彼は詩にそれを求める、しかも深い絶望の淵の奥からそれが幻に過ぎず、いっそう大きな絶望をもたらすに過ぎないことを自覚しながら、なおかつ求め続けるのである。それは、自己の神性を信じられなくなった「流謫の神々」の悲劇にはかならない。

(1) 文中のサンターの研究は A. I. Sandor: *The Exile of Gods. Mouton, the Hague, Paris 1967* である。ハイネの晩年の作品 *Die Götter im Exil* にその標題をとっているものと思われるが、このテーマをハイネの人と思想の基調として追求して行こうとするユニークな研究である。

(2) この小論は、「流謫の神々」というテーマの全般的考察に先立ついわば序論である。

(3) ハイネ全集は、アウフバウ版とエルスター版を使用した。

(一橋大学助教授)